

漢法苞徳塾資料	No. 547
区分	治療論
タイトル	生活習慣病の鍼灸治療について
著者	八木素萌
作成日	1999.04.29

I. 生活習慣病という語について

生活習慣病とは、どういうものかについて『広辞苑』第5版の記述と『成人病の漢方療法』を調べた。そして、呼称が、「老人病」→「成人病」→「生活習慣病」と代わってきたが、それに含まれている病名には何の変りもないことも判った。高脂血症や高血圧などの「成人病」が、児童・少年・青年などにも、近年かなり見られるようになったので、「成人病」という言い方が適当でなくなって「生活習慣病」と言い換えられるようになったのである。「生活習慣病」の如何に治すべきかという臨床問題は、その発症の仕方が、一般の病気と異なって、「何時この病気に罹ったのかが判らない」発症という点（特徴）に着目すれば、“如何に取り組むべきか”が明らかになる。先天的・体質的な弱点が、ジリジリと長時間かかって表面化した、と思われるのが大きな特徴である。

II. 漢方的な治療の特色に関して

このような「生活習慣病」の発症型を、漢法医学的に言えば、まるで内傷病・臓病・雑病の発症型である。別な表現をすると、外感病の治療とは全く異なる「内傷病」治療の方式で対処することが求められるのである。参考までに、湯液治療の立場から書かれた『成人病の漢方療法』（創元社・漢方双書2・寺師睦濟著）を読むと、「症状は水に浮いている氷山のようなものである。故に、氷山の一角だけを目当てに治療しては成人病は絶対に治らない。すなわち、対症療法では治癒しない。氷山の大半にポイントをあて、これを改善することにある。それには、原因療法と対症療法とを兼ね合わせた漢方治療が最良の療法である」という趣旨のことを明瞭に書いている。かかる考え方は、まさに漢法医学の治療思想である。これを鍼灸治療でも実施していく臨床が求められる。この考え方の線に沿った取穴・配穴と施術にとっての、基本的な極めて重要な示唆が、鍼灸医学の「古典」のなかに記述されている。

III. 治療のポイント

内傷病（蔵病・虚病）には、病証が具体的に発症するキッカケとなるものが必要である。それは、その人が季節の変動に弱いということに示唆されている。『黄帝内経』の多数の篇の中には、しばしば強調されている。季節毎の総合的な特徴=つまり【季節の気】が、人にとっては時に病因として作用する。故にこの点を把握した診療が行われなければならない、と。

健康な普通の人や元気な若者にとっては、単に”季節が変わったなあ”と感じる程度の季節変化が、「内傷病」や「生活習慣病」の素因を持っている者には、“病因としての意味”を帯びて作用することが少なくない。それは、まるで「日和見感染」である。「内傷病」や「生活習慣病」が、発症しやすい素因を持っている人は、「痰飲や瘀血」などが、非常に形成されやすい傾向を抱えている。発症する時には、普通の人にとっては「何でもない気候変化」なのに、この変化に感応して、容易に痰飲や瘀血などが生じてしまうのである。もともと持っている生理的なもの（産生物）が、病理的な意味を帯びるに至って、好ましくない作用が現れたのである。このような「生理的産生物が病理的産生物に転化した」といえる発病の〔機作〕を理解することは、高い治療効果をあげるため不可欠である。

素因という抽象的なものを、「実態的なものにおいて把握する」一種の転換が必要になる。つまり、「転化して病理的なものになった生理的産生物」が経絡の正常な機能を妨げているので病証が現れたと解釈できる認識に、転回することによって、始めて「予防的な治療」を具体的に組み立てることが可能になる。

臨床的に言えば、微弱外邪を早期に克服する治療（生活改善と治療的取穴）の問題と、素因が抱えている、容易に病理的な意味に変化しやすいもの（大部分が痰飲と瘀血）を効果的に消滅させる治療とを、兼ね合わせることに他ならない。

再論すると、

- ①微弱外邪のカット
- ②素因が具体的に抱えているもの（痰飲や瘀血が生じやすい）の処理
- ③体質的な弱点の補強

が、基本的な対処である。この三方面の取穴問題を検討したい。

IV. 加齢現象及び健康と治療に関する古典の記述

『黄帝内経』と『難経』にある主な記述を、思い切った意識をして、「生活習慣病」＝「老人病」の治療にあたるための、土俵・土台となる思想の形成に役立ちたい。

この考えを、今一步進めて

- 〈a〉 加齢現象
- 〈b〉 健康観
- 〈c〉 治療観

として、古典の中に示されているものを学びたい。

V. 汎用太鍼を用いる場合の問題

実技の際には、私が日常的に繁用している「汎用太鍼」を用いるので、ここで若干の説明をしておきたい。「汎用太鍼はパワーの強い鍼」で「広範な疾病に用いられる無刺入鍼」であるから、受療者を大幅に拡大できる鍼といえる。それだけに、鍼の特色を生かした運用が望ましい。この鍼の特色と運用手技の基本的な事柄を説明する。

VI. 診察・診断論及び治療論の検討

- 〈a〉 病因の判定方法
- 〈b〉 虚実判定・補瀉判定の問題
- 〈c〉 治療取穴の原理

などの基礎的部分を土台にしつつ、(V)の所で述べた治療課題の問題を、取穴問題として転回させてアプローチする。

VII. 取穴論の重要問題

治療の先後の問題、ツボ選定の方式の問題、先に取穴した点から後の取穴点へと気が流れて行く傾向など、気の流れのコントロールの問題。組み合わせによって変わるツボの治効の問題。何よりも大きい問題は、補瀉の選択問題である。これは別の角度から言えば虚実判定の問題に他ならない。

「点・線・面」の治療論に関して。基本病態に対応する問題。実技の際には汎用太鍼を用いて、漢法苞徳塾方式の「触診を主とした診察」を、「診察チェック表」に記入した後、病状・病態を判断してからの施治を供覧する。その要点を説明しながら、論じて行きたい。